

最終報告書レポート

タイトル.

タイとカンボジアの映画とその背景にある歴史民俗の研究

1. 活動概要

バンコク近郊にあるタイの国立フィルムアーカイヴと、プノンペンにあるボパナ視聴覚リソースセンターで映像資料の閲覧、資料の収集など研究活動をおこなった。前者では「サラヤ国際ドキュメンタリー映画祭」にて映像作品を鑑賞し、太田信吾監督の『わたしたちの特別な時間の終わり』上映後のQ&Aに出演。後者では「カンボジア国際映画祭」に参加し、カンボジアとラオスの特集上映を研究した。

上記で蓄積した知識をもとに、タイ東北(イサーン)にて、主に映画『東北タイの子』やアピチャップン・ウィーラセタクンの映画・映像作品の舞台になった土地を訪問、寺院の人たちやモータム(呪術師)らにピー信仰に関する聞きとり調査をした。

タイ北部ナーン県では、『Tawan Yim Cheng』に登場するムラブリ族の村を訪問し、長老ほかに聞きとり調査。ウィット・クナーウット監督『山の民』の舞台となったチェンマイ・チェンライ近郊の山間部では、主にパローン族、ラフ族、アカ族の長老やシャーマンから、信仰と生活習慣に関する聞きとり調査をおこなった。タイ南部のユッタナー・ムクダーサニット監督『蝶と花』の舞台となったマレーシア国境地域も訪問した。

プノンペンでは、リティ・パン監督の映画のテーマであるクメール・ルージュ時代の史跡の調査をおこない、北東部山間部の少数民族のドキュメンタリーを視聴し、ラタナキリ州・モンドルキリ州を訪れ、トンブーン族、ブラウ族、ジャライ族、クレン族、プノン族の村を訪問し、シャーマンと指導者や長老から民俗調査をおこなった。

2. 受入機関での活動状況やコラボレーターとの協同

タイ国立フィルムアーカイヴにて、計8日間の映像資料調査を実施。サラヤ国際ドキュメンタリー映画祭にも参加することができた。また、同アーカイブの Sanchai Chotirosseranee 氏と Putthapong Cheamrattonyu が、映像資料の収集と閲覧において大きな助けとなった。

2015年の山形国際ドキュメンタリー映画祭にて、シンポジウム「実験映像としてのドキュメンタリー」と一緒に登壇した、タイ国立フィルムアーカイヴのチャリダー・ウアバムルンジット氏が全面的に協力してくれて、映画祭では太田信吾監督『わたしたちの特別な時間の終わり』上映後に乞われて壇上にあがり、Q&Aに出演した。

ボパナ視聴覚リソースセンターの荒井和美氏とソヒアアップ・チア氏とともに、カンボジア国際映画祭のオープニング・レセプションに参加し、カンボジアの映画人や研究者と交流することができた。同センターの Ratana Lach 氏は、英文の資料と映像資料の収集に大いなる助けとなった。

3. フェローシップ活動記録

- 2/10 成田発、バンコク着
- 2/11 国内線でウボン・ラチャタニーへ移動
『東北タイの子』の舞台になったヤソートーン県やサイムーン村を訪問
- 2/13 国内線でバンコク着
- 2/14 タクシーで郊外のサラヤー着、タイ国立フィルムアーカイヴ
- 2/18 夜行列車で東北部のノンカーイ着
バンチエンダ村で調査
- 2/20 列車でコーンケン着
- 2/21 北部のナーンに着
- 2/23 バスでチェンマイ着、山岳部の村を訪問
- 2/27 バスでチェンライ着、山岳部の村を訪問
- 3/3 国際線でカンボジアのプノンペン着
- 3/10 乗り合いバスで北東部ラタナキリ州のバンルン着、山岳部の村を訪問
- 3/14 乗り合いバスで北東部モンドルキリ州のセンモノロム着、山岳部の村を訪問
- 3/16 乗り合いバスでプノンペン着
- 3/17 国際線でバンコク着、タクシーでサラヤー着
- 3/21 国内線で南部ハートヤイ着
- 3/24 ハートヤイ着、バンコク着、帰国便に乗る
- 3/25 成田空港着

4. フェローシップ活動を終えて

「プロジェクトに関する今後の予定や展望等」

ひとつは、2018年初頭に刊行予定の共編著『イスラーム映画(仮)』(フィルムアート社)にて、タイで調査した映画とタイ南部の調査旅行をもとに、ユッタナー・ムクダーサニット監督の『蝶と花』論を書く予定。同じ本に、タイ映画でイスラーム文化を扱ったドキュメンタリー映画『改宗』、劇映画『孤島の葬列』について執筆予定。

もっと大きなところでは、タイ東北部を舞台にした映画と歴史民俗(『東北タイの子』の小説版と映画版、アピチャップン・ウィーラセタクンの諸作品)、タイ北部の少数民族をテーマにした映画(ウィチット・クナーウット監督『山の民』ほか)と歴史民俗、そしてカンボジア北東部の少数民族をテーマにしたドキュメンタリーの3者についての論考をまずインターネット上の媒体(ドキュメンタリーマガジン neoneo)に掲載し、すでに書物に発表したアピチャップン・ウィーラセタクン論と組み合わせて、2、3年以内に単著『間-東北論(仮)』として刊行したい。

その他、雑誌や書籍の原稿依頼、講演の依頼があったときに、または大学などの授業で今回の研究で蓄積した知識を使いたい。

注釈等.....



【写真1】イサーン（東北タイ）のヤソートーン県サイムーン村に到着。小説『東北タイの子』を書いたカムプーン・ブンタウィーの故郷で、小説の舞台になった。ウィチット・クナーウットの映画版『東北タイの子』も傑作。乾季の大地で暮らす農民たちの力強さを感じる土地柄でした。



【写真2】タイ国立フィルムアーカイヴのメディアテーク。タイにおける活動拠点。図書室とDVDライブラリーを完備。ここに通って数々の名作を見ました。
住所 94 Moo 3 Phutthamonthon Sai 5 Road, Phutthamonthon 73170, Thailand
web サイト <http://www.fapot.org/en/home.php>



【写真3】タイ東部のノンカーイにて、アピチャッポン・ウィーラセタクン監督が『メコンホテル』を撮影したホテルを視察。



【写真4】 ノーンカーイ近郊、アピチャッポン監督がアート作品『花火』を撮影したサーラケオクー寺院を視察



【写真5】 東北タイのウドンターニー近郊のバンチエンダ村で、85歳のモータム（呪術師）の方と面会と取材。妻がピーファー（憑依儀礼）に夢中になり、娘がピーポーブ（内臓を喰らうお化け）に取り憑かれた末に、治療師になった。今は仏法を極めるために「森の寺院」で独り暮らしをしている。アピチャッポン映画やタイのホラー映画の民俗的背景となっているピー信仰について理解を深めました。



【写真6】 タイ東北部コーンケンにて、Two ladies of the waterの廟。アピチャッポン監督の『光りの墓』撮影地。メコン河で溺死して、その後、川を往来する人たちの守り神になったラオスの王女ふたりの口承をもとにしており、ノーンカーイでもこの神社（Chao Mae Song Nang）を見つけることができた。『光りの墓』を読み解くための重要なフアクターになるかもしれません。



【写真7】タイ北部ナーン県、ラオス国境近くのファイ・ユアック村。ムラブリ族の長老のアイパー氏に取材。かつて「黄色い葉の精霊」と呼ばれた400人位しかいない狩猟民族。タイ映画『タワン・イム・チェーン』は、80年代に彼らが「発見」されたときの騒動をモデルにしている。「2、30年前まで、ジャングルを移動しながら狩猟生活をしてきた。森林伐採と焼畑で森がなくなり定住したが、今でも森に帰りたい」とのことでした。



【写真8】チェンマイ近郊のアカ族の村。ウィット・クナーウット監督の『山の民』では、双子が生まれると不吉なものとして殺し、両親を村から追放する風習がテーマになっている。また、日本列島の鳥居の起源という説のあるアカ族の鳥居と、日本の道祖神と類縁性が指摘される、性器を強調した木彫りの祖先像などを調査。



【写真9】チェンライ近郊のラフ族の村にて、シャーマンの悪魔祓いの儀礼。映画『山の民』の背景となる民俗文化の調査。幸運をもたらすブレスレットの呪術を施してもらいました。



【写真10】カンボジア・プノンペンのボパナ視聴覚リソースセンター。カンボジアでの研究の拠点。2階に図書室と映像ライブラリーがある。

住所 #64, 200 Oknha Men, Phnom Penh, Cambodia

web サイト <http://bophana.org/>



【写真11】リテイ・パン監督の映画『S21』『ドッチ地獄の収容所長』『消えた画』ほかのクメール・ルージュものの舞台となった、トゥルスレン強制収容所を見学。



【写真12】カンボジア国際映画祭のオープニング・セレモニーに、ポパナセンターの荒井和美氏、ソシアップ・チア氏、国際交流基金の濱田祐生氏らと参加。ラオス映画特集とカンボジア映画の新作特集が、特に研究に役立ちました。



【写真13】カンボジア北東部のラタナキリ州の山中、トンプーン族の村で動物供犠の祭りを視察。男性の父の長寿を願って、森の精霊に生け贄の牛をささげる。呑めや歌えの酒宴のあと、音程の異なる5つの銅鑼を演奏しながら、男たちは生け贄の周囲をまわる。少数民族に関するドキュメンタリー映画『Anger of the Spirits』Thomas Weber 監督、『Lon : Tompuon Village』Martin Potter 監督、『The Last Refuge』Anne-Laure Poree 監督などの背景にある、歴史民俗的な背景を調査。



【写真14】ラタナキリ州の山中、クルン族の村。やせた少女の健康を取り戻すため、自家製の焼酎を飲んで、精霊の託宣と言祝ぎの言葉を伝える高齢のシャーマン。視察と聞き取り調査の目的は、上記に同じ。



【写真15】モンドルキリ州の山中、プノン族の森の精霊のご神体。白いひげを生やした老翁の姿をしている。視察と聞き取り調査の目的は、上記に同じ。



【写真16】バンコク近郊のタイ国立フィルムアーカイブにて、サラヤ国際ドキュメンタリー映画祭に出席。ディレクターのサンチャイ氏とチャリダー氏、太田信吾監督と一緒に。



【写真17】サラヤ国際ドキュメンタリー映画祭にて、太田信吾監督『わたしたちの特別な時間の終わり』終了後に、監督ともにQ&Aに登壇し、英語で1時間近く受け答えしました。